「漱石と広島」の会 会報
第22号

2025年（令和7年）6月1日発行
「漱石と広島」の会

# 『枯野抄』で自身をえぐった芥川龍之介

芥川龍之介の短編に『枯野抄』がある。芭蕉の死に臨んだ弟子が抱いたひそかな解放感を描く。そこには自身が漱石の死に抱いた感情を重ねていた―とみる県立広島大学の坂根俊英名誉教授に、寄稿をお願いした。（石田信夫＝世話人）

坂根 俊英

## 師・漱石の死は「歓びに近い苦しみ」

芥川龍之介が、師事した夏目漱石に対しどんな意識を抱いていたか、残された作品から考えてみたい。

『或阿呆の一生』（昭和2＝1927年）の『先生の死』では、こう述べる。

「彼は巻煙草に火もつけずに歓びに近い苦しみを感じていた。『センセイキトク』の電報を外套のポケットへ押しこんだまま」

「歓びに近い」とは師の危篤に対して不謹慎とみえるが、畏敬する師から受ける圧迫感から解放される予兆を少し感じたのではないかとも読みとれる。

もちろん「苦しみを感じていた」とあるので、大恩ある師を失う悲しみの方がはるかに大きかったであろうことは疑い得ない。

塚本文に宛てた手紙で「僕はまだこんなやりきれなく悲しい目にあった事はありません。今でも思い出すとたまらなくなります」と述べている。

小説『鼻』（大正5＝1916年）を漱石に激賞されて作家デビューした芥川にとって、その年の師の死は、ひとしお衝撃だっただろう。

※　※

12月9日の朝、芥川は『センセイキトク』の電報を受け取った。しかし横須賀の海軍機関学校に着任早々で重要な会議もあり、早稲田南町の漱石の家には11日の午後になってから着いた。その夜、2日目の通夜に出席し、翌日の青山斎場の葬儀では赤木桁平と受付を手伝った。『葬儀記』（大正6年）にはこう記している。

「式がだんだん進んで、小宮さんが伸六さんと一緒に、弔辞を持って、柩の前へ行くのを見たら、急に瞼の裏が熱くなってきた。…（久米の）眼にも、涙がいっぱいにたまっていた。僕はとうとうやりきれなくなって、泣いてしまった。…お焼香をした。すると、また、涙が出た」

「涙」という悲嘆の表出を抑えようとしても、ついには抑えきれなかった気持ちが素直に告白されている。

漱石の一周忌の逮夜句座では『黄昏るゝ菊の白さや遠き人』と詠んでいる。

※　※

師の死から2年後、芥川は『枯野抄』（大正7年）を出す。

芭蕉の臨終に参集した門弟たちの様子と心情を描いた小説である。この作品については芥川自身が『一つの作が出来上がるまで』（大正9年）という小文で、その成立過程を説明している。

「それを書くについては、先生の死に会う弟子の心持といったようなものを私自身もその当時痛切に感じていた。その心持を私は芭蕉の弟子に借りて書こうとした」

この観点に立って『枯野抄』を読み直せば、弟子の一人、（内藤）丈艸の心情を描いた箇所が注目される。

「（丈艸は）限りない悲しみと、そうしてまた限りない安らかな心もちとが、おもむろに心の中へ流れこんでくるのを感じ出した。…丈艸のこの安らかな心もちは、久しく芭蕉の人格的圧力の桎梏に、空しく屈していた彼の自由な精神が、その本来の力をもって、ようやく手足を伸ばそうとする、解放の喜びだったのである」

そして「彼はこの恍惚たる悲しい喜びの中」にあって「恭しく臨終の芭蕉に礼拝した」と語られている。

ここに作者は、丈艸に託して師の漱石に対する自身の思いを投影させているように思われる。

すでに述べた「歓びに近い苦しみ」という心情に重なるものがここにある。芥川にとって師・漱石とはそれほど大きな存在だったのである。

2面に続く

〈参考文献〉
『芥川龍之介全集』（全12巻）　岩波書店　1978
『芥川龍之介全作品事典』　勉誠出版　2000
『夏目漱石事典』　勉誠出版　2000
『芥川龍之介集』　角川書店　1970